

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

アメリカ、国際関係：アメリカ文化史(1)(2)（1 年次以上：選択必修 2 単位）、国際関係入門(1)（1 年次以上：選択必修 2 単位）、国際文化演習(2)(2 年次以上：選択必修 2 単位）、国際文化特講 II（3 年次以上：選択必修 2 単位）

英語関係：リスニング I（1 年次：必修 2 単位）、リスニング III（3 年次以上：選択必修 2 単位）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

アメリカ、国際関係：アメリカをはじめとする他国に関する知識をさまざまな角度から伝えることによって、学生の目を世界に向けさせるとともに、教養を深め、異文化理解の楽しさや難しさを認識させることを目標としている。

英語関係：ニュースや学術的な題材を扱った英文を繰り返し聞き、そこに出てくる語彙を増やすことで、TOEIC などの資格試験に対応できるリスニング力を伸ばしていくことを目的としている。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

アメリカの歴史を文化、社会を中心に建国期からたどるアメリカ文化史(1)(2)では、写真を見せたり、映像を使ったりして、学生に興味を持ってもらうよう工夫をした。また、新聞記事やニュース映像を適宜使い、現在のアメリカの状況に関しても解説し、現在を理解するうえで過去を知ることの大切さを伝えた。さらに、リアクションペーパーを活用し、学生の理解度を図るとともに、記述力の向上も目指した。

国際関係入門(1)では、国際関係を知るための基礎知識として、さまざまなトピックについて歴史的背景から説明した。新聞記事を毎回授業で配り、読ませることによって、新聞記事で見られる硬い文章に慣れることを目指すとともに、扱った内容に関するニュース動画や、政府、NGO などが出している短い動画を授業の終わりに見せ、学生のより深い理解を目指した。さらに、資料の調べ方や引用方法、また、プレゼンテーションの効果的な示し方などを説明し、学期の終わりに学生に新聞記事を調べ、要約し、発表させた。

国際文化演習(2)は大統領のスピーチを訳すことで英語力を高めることが目的の授

業であるが、大統領のスピーチする姿を映像で見せることで、効果的なスピーチとはどのようなものなのかを学生に考えさせた。また、込み入った英語の文章はより詳細に構造を説明し、文法力、また、読解力の向上を目指した。

さまざまなマイノリティの人々が映画という「主流」のアメリカ文化でどのように描かれているかを扱う国際文化特講 II では、映画を利用し、文化にステレオタイプがどのように反映しているかを示した。各回で取り上げた人種の現状だけでなく、歴史的背景も詳しく説明した。また、各授業の初めに、各人種に対するイメージを学生同士で話し合わせることで、学生自らにも偏見があることを認識させた。さらに、アメリカ映画における日本人表象を歴史的に追うことで、日米という国の関係が文化にどのように反映しているかも示した。講義系の授業であるが、学生同士のディスカッションも多く取り入れた。

リスニング III の授業では、クラスの中でのリスニング力に差があることを念頭に置いて、クラス全体に一斉に音声を流すのではなく、各々のタブレット、パソコン、あるいはスマホを使い、繰り返し英語を聞くようにさせた。穴埋めの問題を解くスピードに差があったため、教員が机間巡視し、記入が終わった学生同士を集めて、答えを比較させることで、学生が手持無沙汰になる状況をなくすようにした。また、予習については答え合わせをする前に、より小さなグループで答えを比較し、合わなかった点についてはその差異がなぜ出ているのかを話し合わせ、疑問点を明確にすることによって教員の解説に関心を持たせることを目指した。リスニング I(1)(2)については受講生が少なく、また英語力が高い学生がそろっていたため、テキスト以外に英検や TOEIC の過去問、また、ニュースなどの教材を追加し、学生の英語力に柔軟に対応した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

アメリカ文化史、国際関係入門、国際文化演習(2)は、例年教員の説明が授業の多くを占めてきたが、本年度は受講生が少なかったため、よりインタラクティブな授業となった。学生の疑問や意見を聞き、より丁寧な説明をしたため、例年よりもより学生の理解度に沿った授業を行うことができたと考えられる。

大学の授業評価アンケートの視聴覚資料を含めた教材の利用は効果的であるかとの問いに、国際文化特講 II[2025 年度前期]では 85%の学生が「そう思う」と答えた。また、100%の学生が教員は重要なポイントをはっきり示したか、という問いに「そう思う」と答えている（エビデンス 1）。本授業で提出させたレポートの多くで、偏見や差別をなくすための意見が授業で論じた点を踏まえて示されており、学生の理解度が高かったことが伺える（エビデンス 2）。

リスニング III については、学生間のリスニング力に大きな開きがあり、各自で問題を解かせた点は良かったと思う。学生もみな熱心に問題に取り組んでいた。しかし、授業評価アンケート[2025 年度後期]で速さ、量、そして理解度において、大多数が適切だったと答えていたのに対し、「どちらともいえない」と答えた学生が少数いた。レベル別で行ってきた 1 年 2 年のリスニングと違い、本授業はレベルに分かれていないのでこの結果は仕方がないものではあるが、理解度を高める工夫が必要であると考えられる(エビデンス 3)。

5 今後の目標 (これからどうするか)

リスニング科目については、自分のペースで各自問題を解き、最後に他の受講生と比較するという形が学生にとって良いものであると感じるため、今後も PC やタブレット、スマホを活用していきたい。しかし前述のように、1 つのクラスで学生の英語力に大きな差がある場合にどのように対応すればよいかを考えることは今後の課題である。講義系の科目については今後も受講生の減少が見込まれることから、これまでの内容を維持しつつ、学生の理解度に配慮しながら授業を進めていく必要があると思われる。

6 エビデンスとなるもの (資料の種類などの名称)

エビデンス 1 : 2025 年度前期授業評価アンケート結果 (非公開)

エビデンス 2 : 学生のレポート(非公開)

エビデンス 3 : 2025 年度後期授業評価アンケート結果 (非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

向野 光

(記入日：2026年2月27日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

学部

介護等体験（2年通年選択必修科目1単位）（児童教育・中高・目白）

特別支援教育（保育を）含む（幼児教育3年後期必修科目2単位）

大学院

※ 本年度 担当している大学院は開講していない

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育理念・目標

学生が教職の現場に立った際、指導上、特別な支援を必要とする児童・生徒に対して共感的な支援ができるように、指導の基本的な姿勢と基礎的な知識を身につけさせることである。また、そうした児童生徒への支援方法を自ら工夫し、他の職員と協働して支援体制を構築することができるようにすることである。

また、理論を理解するために実際の教育現場に学生自身が足を運び、現場での経験を重ね、その経験を大学で他の学生と共有した上で、講義において理論として整理し、習得することができるように授業を進めることである。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

学生が大学で学修する特別支援教育に関する理論や方法を教育現場において発揮し、児童・生徒を指導する上で必要な実践的な力を身につけ、定着させるために、教育現場での体験・経験と大学での講義との往還教育を重視している。

介護等体験（事前・事後指導）では現場で実践している社会福祉施設の施設長や特別支援学校校長による実地に即した事前指導を行う。

授業では資料を使い、実習に至るまでの書類の作成・アポイントの取り方、事前準備をそれぞれ野施設に合わせて指導している。又実習にあたっての注意点や現場における介護のポイントを指導し、具体的な授業を心がけている。また、授業の中に、近隣公民館でおこなっている障害者の生涯学習講座への参加を複数回ボランティア体験させ、予め福祉施設での実習に先立ち障害者との接し方について学ぶ経験を設けている。また、施設での介護等体験中には教員が必ず訪問し、体験先の職員と面接し、実習の様子路聞き取っている。また、

実習終了した者から施設での様子や成果を全体に発表している。また事後指導はそれら経験をレポートにまとめさせると同時にパワーポイントで発表資料を作成し、全体発表し、この経験を全体で共有することで経験の定着を図っている。

目白の授業においては介護等体験は施設でのボランティアの経験ができないので、準備した映像資料を多用し、ボランティアの経験ができない事を補い、逐次解説をすることで補充することを心がけた。

特別支援教育（保育を含む）では特にインクルーシブ教育システムの構築に向けての基礎的な知識を学ぶために、幼小連携を緊密に図るため、発達障害の基礎知識をはじめとして、各種障害の実態と、具体的な支援を想定して国立特別支援教育総合研究所のインクルーシブ教育システム構築支援データベースを実際に使用しながら、具体的な支援方法についての理解を進めている。また、具体的な支援の例では、これまでの教育現場での実例を示しながら解説することで、より理解しやすいように心がけている。また、途中では教材としてDVDの視聴を行い、障害の特徴や指導について具体的なイメージを持ったうえで、授業の内容を理解しやすいように工夫している。

すべての授業において毎回プリントを作成し、それに基づいたパワーポイント資料を作成し授業中に示しながら授業を行っている。主体的に学習を進める機会を多くするために、課題に対してグループでの討議や発表を複数回行っている。また、評価のためのレポートでは発達障害に関するDVDの視聴課題を課している。映像を通して障害の見取りを行い、実際の行動の変容を把握する課題に取り組んでいる。授業では講義だけでなく、仲間とともに考える時間を通して障害についての理解を深めるようにしている。また、特別支援教育に関心を持つ学生には、児童教育学科の学生とともに授業時間以外にも自主研究会を催し、学生相互が協力・相談しながら学びを深める機会を設けた。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

介護等体験・教育インターンシップでは介護等体験・教育ボランティアを経験した学生がその都度体験レポートをまとめ、発表を行うことで自らの体験を振り返ることを繰り返した。個人で行う介護等体験を他の学生の発表を聞くことで、種々の福祉施設での体験の様子を知ること、経験値を高めることでできた。回を重ねるごとに、児童生徒の前での対応が向上し、教師としての自覚を高めることができた。（エビデンス1）

この授業に関係しておこなったボランティア体験。（エビデンス1）
特別支援教育（保育を含む）においてはDVDの視聴により、障害についての観察体験を行った。授業で行った理論を、実際の観察を通してまとめることで、知識の定着が図られた。

（エビデンス2）

5 今後の目標（これからどうするか）

- 介護等体験では学生をボランティアとして地域の公民館のボランティアと共催で障害者のための生涯学習講座の学習支援を必修としている。地域の公民館との連携が深まり、特に公民館長（元中学校校長）からの指導も積極的に取り入れ、効果を上げている。これからも、地域での活動とボランティアの内容の充実を進めていきたい。また、現場体験と講義との往還教育を深め、より実践的・経験的な授業を行っていきたい。
- 特別支援教育（保育を含む）では映像資料に加えて、DVDの視聴を行い、レポートを作成する。また、授業中にスマホ等でネットを検索し、画像を自分で探す経験をするなどして、具体的な資料の検索のイメージを持てるようにしている。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 体験レポート・発表用パワーポイント資料・リアクションペーパー（非公開）
- 2 DVD 課題レポートの作成 リアクションペーパー（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

国際英語学科 佐藤 翔馬

(記入日：2026年2月25日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

英文法 I（1年次：必修2単位）、ライティング I（1年次：必修2単位）、言語学演習(2)（2年次以上：選択必修2単位）、言語コミュニケーション特講 II（3年次以上：選択必修2単位）、児童英語教育法、児童英語教材研究、児童英語指導実習、英語 I (1)/(2)（共通教育科目、1年次：必修1単位）、英語 II (1)/(2)（共通教育科目、1年次：必修1単位）、など

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

言語学や、第二言語習得論を扱う言語コミュニケーション特講 II については、教師による一方的な講義だけではなく、問題演習、ペアワークやグループワーク、ディスカッションを取り入れることで、当該分野に興味を持ってもらうとともに、なるべく身近に感じてもらうことを目指している。国際英語学科の英語科目や共通教育英語科目については、日本語訳などの資料をオンライン上にアップロードし、受講者がいつでも閲覧できるようにすることで、英語の学習がしやすい環境づくりを心がけている。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

言語コミュニケーション特講 II では、個人課題やグループワーク、ディスカッションを通して理論や仮説を自分の立場に置き換えて考えるとともに、他者の意見に耳を傾けることで、第二言語習得論を少しでも身近に感じてもらえるよう努めている。課題は必ず紙面にまとめてもらったうえで回収し、講評しつつ返却している（エビデンス 1）。また、講義資料としてパワーポイントを使用した。使用した資料はオンライン上にアップロードし、受講者がいつでも復習やレポートの執筆に利用できるようにしている（エビデンス 2）。

英語 II (1)/(2) では英語の長文を精読するが、受講者によっては難易度が高い長文であるため、日本語訳を書き写すことだけに注力してしまう受講者がいる。日本語訳を書き写すだけでは、語彙や文法、発音などの知識が身につかず、学

習効果が得られない可能性がある。そこで、日本語訳を受講者に発表してもらい、その日本語訳に修正や解説を加えつつ、即時に担当者がオンラインのファイルに打ち込むようにしている（エビデンス 3）。このことにより、受講者は自身の端末で日本語訳を見ながら授業を受けることができ、語彙や文法、発音などの学習に集中することができるとともに、事後学習や試験勉強に利用することができると考えられる。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

言語コミュニケーション特講Ⅱでは、受講者たちが積極的かつ楽しそうにグループワークやディスカッションに取り組む姿勢が見られた。特に「タスク中心アプローチ」についての授業では、タスクというものについてよりよく理解してもらうために、実際にタスク中心アプローチに則した英語の課題を受講者たちに作成させ、取り組ませた。この活動により、受講者はタスク中心アプローチについての理解を深めただけでなく、自身が作成した課題の問題点にも気づいたようであった。

英語Ⅱ(1)/(2)では、受講者たちが日本語訳を書き写すことに気をとられず、語彙や文法についての解説を聞き、積極的にノートをとる様子が見られた。これは、自身の端末で日本語訳をいつでも確認することができるため、聞き逃してしまうおそれなくなったためであると思われる。

5 今後の目標（これからどうするか）

英語の授業に限った話ではないが、やはり受講者の生成 AI の使用にどう対処するかが大きな課題であると感じた。英語Ⅱ(1)/(2)では上述のとおり、受講者が自身の端末で資料を見ながら受講する形式をとったが、明らかに生成 AI や翻訳サービスを利用していると思われる回答をする受講者が見受けられた。多くの大学が生成 AI についてのガイドラインを設けているようだが、受講者が課題やレポートなどに制限を超えて生成 AI を使用していないかどうかは担当者が判断するほかない。受講者には、単に生成 AI や翻訳サービスの使用をひかえるよう指導するだけでなく、それらを安易に使用することがいかに危険であり、学習の妨げになるかを理解してもらう必要があるだろう。そのためには、授業担当者だけでなく学校全体としての取り組みが必要であると感じた。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

エビデンス 1：言語コミュニケーション特講Ⅱ 受講者の提出物（非公開）

エビデンス 2：言語コミュニケーション特講Ⅱ 講義資料（非公開）

エビデンス 3：英語Ⅱ(1)/(2) オンラインの資料（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

山本麻里耶

(記入日：2025年9月15日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

科目名	年次・期間・科目 (必・選)	単位数
基礎ゼミナール	1年次前期必修科目	2単位
セミナー	3年次通年必修科目	4単位
リスニング I (1)	1年次前期後期必修科目	1単位
英語 II (1) <再履修>	2年次以上前期共通教養科目	1単位
英語 I (1) <Dクラス>	1年次前期共通教養科目	1単位
ライティング III	3年次前期選択必修科目	2単位
コミュニケーション基礎演習	2年次前期必修科目	1単位
目白ニュージーランド研修 (事後学修)	2年次以上、後期(前期)選択科目	2単位
我孫子ニュージーランド研修 (事前学修)	2年次以上前期選択科目	2単位
目白ニュージーランド研修 (事前学修)	2年次以上前期選択科目	2単位
大学院 Academic Writing(2)	1年次以上前期選択必修	2単位

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念は、学生に多様な視点や価値観を理解させ、他者の立場を尊重したコミュニケーションを促すことである。また、学生がこの理解を基に、社会問題を調査・分析し、自分の意見や解決策を提案できるようにすることである。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

「基礎ゼミナール」と「コミュニケーション基礎演習」では、必要な文献や情報を収集・整理・要約する過程を通じて、自分の意見を論理的に相手に伝える訓練を行った。授業内で作成したレポートは発表に活用し、他者の多様な見解に触れながら、意見交換や質問を行うことでプレゼンテーションへの意識を高めた。

「セミナー」では、英語原典への理解を深めるために *My Father's Dragon* を講読した。また、レポートや卒業論文作成に必要な情報収集の方法を学ぶため、各自がテーマを設定し、実際に文献を調べ、授業内で発表した。

「リスニング I (1)」では、やや長めの英語音声に慣れることを目的に、世界各地の人々の暮らしや文化、歴史について学んだ。理解を深めるために、関連する英文の読解も適宜取り入れた。

「英語 I <Dクラス>」および「英語 II <再履修>」では、英語コミュニケーション能力の向上を目指し、グループワークを導入。学生同士が教え合いや協力を通じて、知識を共有しながら課題に取り組みやすい環境を整えた。

「ライティングⅢ」および「目白ニュージーランド研修（事後学修）」では、英文エッセイの執筆に関する実践的な練習を行った。まずテキストを読み、テーマに関する知識を深め、クラスでディスカッションを重ねて執筆内容を練った。次に、書いたエッセイを発表し、スマートフォンで自分の発表の様子を録画。内容や発音、態度などを客観的に振り返ることで、読者（あるいは聴衆）を意識した英文作成を指導した。

「我孫子・目白ニュージーランド研修（事前学修）」では、研修で必要となる英文エッセイの作成に加え、ホームステイで用いられる会話表現や文化・生活様式の違いについて学習した。インターンシップ参加者の中には英語による30分以上の面接が必要な職種もあり、自己紹介から専門分野に関する会話まで、英語母語話者の教員による複数回の面接練習を実施した。

大学院科目「Academic Writing(2)」では、理系・文系の幅広いテーマを取り上げ、アカデミックエッセイの執筆練習を行った。各テーマの英文読解を行い、意見を述べるディスカッションの後、賛成・反対の立場からエッセイを書き、2週に1度のペースで発表を繰り返した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

「基礎ゼミナール」および「コミュニケーション基礎演習」では、大学でのレポートや卒業論文作成に必要な基本手順、調査方法、参考文献リスト（注記含む）の書き方、発表方法などを習得することに関して、一定の成果が得られたと考えている（エビデンス①②）。特に、授業内発表においては、聴衆役の学生が積極的に質問や自身の見解を述べることで、発表者との活発な議論が生まれ、授業内での意見交換が活性化していた。

「セミナー」では、現在3年生である学生が卒業論文の作成に向けて、自分の関心領域や論文の書き方を探る中で、一次資料・二次資料の調査を行いながら、各自の疑問を言語化する練習に取り組んだ。学期末には、それぞれがテーマを見出し、調査を開始していたことから、一定の成果が得られたと判断できる。

「英語Ⅰ(1)(2)<Dクラス>」および「英語Ⅱ(1)(2)<再履修>」では、学生同士のコミュニケーションの機会が増え、クラスの雰囲気が徐々に和やかになってきた印象を持っている（エビデンス③④）。学生の学習意欲も少しずつだが向上しており、その効果は定期試験の結果にも反映されていると感じている。

「ライティングⅢ」および「目白ニュージーランド研修（事後学修）」、さらに大学院科目「Academic Writing(2)」においては、授業を重ねることで英文エッセイへの抵抗感が薄れ、提出された課題や発表の内容からは、受講生が英文執筆のコツを掴みつつあることがうかがえた（エビデンス⑤⑥⑦）。

5. 今後の目標

担当科目全体を通して、学生の主体性を高め、問題意識を引き出すための活動が重要であ

ると考える。

「基礎ゼミナール」「コミュニケーション基礎演習」「セミナー」など、自主的な学びを促進する科目では、学生によるテーマ設定を積極的に支援し、教員はその環境整備に注力する必要がある。

「英語Ⅰ(1)(2)<Dクラス>」「英語Ⅱ(1)(2)<再履修>」では、グループワークの導入に加え、個人の問題解決能力を高めるための練習も重要となる。英文読解では、主語への注意が不足する傾向が見られるため、「英語では主語が明確であることが重要」という認識を徹底させる指導を継続する必要がある。

「ライティングⅢ」および「我孫子・目白ニュージーランド研修（事前・事後学修）」では、今後も学生が自己表現の楽しさを理解し、自主性を発揮できるよう支援していきたい。学習テーマやディスカッションに積極的に取り組める雰囲気づくりに努め、学生が主体的に活動できる授業環境を整えていきたいと思う。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ①「基礎ゼミナール」発表原稿（非公開）
- ②「コミュニケーション基礎演習」発表原稿（非公開）
- ③「英語Ⅰ(1)(2)<Dクラス>」試験結果（非公開）
- ④「英語Ⅱ(1)(2)<再履修>」試験結果（非公開）
- ⑤「ライティングⅢ」英文エッセイ（非公開）
- ⑥「ニュージーランド研修」英文エッセイとパワーポイント（非公開）
- ⑦「Academic Writing (2)」英文エッセイ（非公開）

(記入日：2026年2月02日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

科目名	年次・期間・科目（必・選）	単位数
セミナー	3年次通年必修科目	4単位
リスニングⅠ(2)	1年次前期後期必修科目	1単位
英語Ⅱ(1)<再履修>	2年次以上前期共通教養科目	1単位
英語Ⅰ(1)<Dクラス>	1年次前期共通教養科目	1単位
リーディングⅢ	3年次前期選択必修科目	2単位
国際文化特講Ⅰ	3年次以上後期選択必修	2単位
目白ニュージーランド研修（事後学修）	2年次以上後期選択科目	2単位
我孫子ニュージーランド研修（事後学修）	2年次以上後期選択科目	2単位

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育理念は、学生に多様な視点や価値観を理解させ、他者の立場を尊重したコミュニケーションを促すことである。また、学生がこの理解をもとに、社会問題を調査・分析し、自分の意見や解決策を提案できるようにすることである。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

「セミナー」では、前期から継続して、英語原典への理解を深めるために *Elmer and the Dragon* と *The Dragons of Blueand* シリーズを講読した。また、卒業論文作成に必要な情報収集、テーマ設定を学ぶため、各自が卒業論文で扱いたいと考えている作品を選定し、クラスメイトの前で物語の内容、著者について、文化背景などを説明し、授業内発表を行った。

「リスニングⅠ(2)」では、前期から継続して、世界各地の人々の暮らしや文化、歴史について音声やビデオ映像を見ながら学習していった。加えて、理解を深めるために、関連する英文の読解も適宜取り入れた。

「英語Ⅰ(2)<Dクラス>」と「英語Ⅱ(2)<再履修クラス>」では、前期から継続しているグループワークを取り入れ、学生同士がコミュニケーションをとりやすい環境を整えた。学生同士で相談したり協力して問題を解いたりする活動については、以前よりもスムーズに行えるようになってきたと感じている。また、テキストの音読練習を継続した結果、「英語を発声することで、これまで以上にメッセージを伝えるための道具として捉えられるようになった」という意識の変化を報告するコメントも、アンケートで寄せられた（エビデンス①）。さらに、前期末に課題として挙げられた「主語」への意識を高めるため、授業内では「誰が（は）？」と繰り返し問いかける指導を行った。

「リーディングⅢ」では、1つのテーマについて「賛成・反対」の意見が書かれた英文を読んで、英文の構成、表現、内容理解を深めていった。授業ではグループを作り、相談したり、各テーマについて意見交換を行ったりしながら、調査内容、それぞれのグループで出た意見をクラス内で発表し、情報のシェアと多様な考え方を学んでいった。

「国際文化特講Ⅰ」では、動物を扱った文学作品を読んで、学生による物語の分析練習を行なった。授業では、毎回担当箇所から、気になったところ、わからなかったところ、面白かったと感じたところを学生が発表し、そこで出た意見や情報をクラス内で議論した。ディスカッションで出た情報をクラス内で共有することで、新たな気づきや、作品の魅力について考えてもらい、課題にした物語の理解を深められるように促した。

「ニュージーランド研修」(事後学修)では、研修内容についての口頭報告に加え、日本語・英語による報告書を作成し、日本とニュージーランドの文化・習慣・職業意識の違いについて考察してもらった。さらに、海外研修の成果発表として、学園祭初日にはパワーポイントを用い、各自の研修先での活動、日常生活、オークランドの様子について英語で発表会を行った。

4. 成果 (どうだったか：結果と評価)

「セミナー」では、現在3年生である学生が卒業論文の作成に向けて、自分の関心領域や論文の書き方を探る中で、一次資料の調査を行い、更に教員が見つけた二次資料の英語論文の一部を読解し、クラスメイトに説明する練習に取り組んだ。学期末に提出するレポートのテーマについてもクラスで話し合い、図書館へ行って実地調査も行ったため、次年度に作成予定の卒業論文の資料集めの準備が少し整ったように感じている (エビデンス②)。

「リスニングⅠ(2)」では、学生がリスニング教材に慣れ、異文化の習慣や価値観の違いにも興味を持って学んでいる様子が見られた。国によって多様な職業の人々が存在し、住居や生活様式が異なることに驚きつつも、関心をもって学習に取り組む姿が印象的であった。

「英語Ⅰ(2)<Dクラス>」と「英語Ⅱ(2)<再履修クラス>」では、学生同士のコミュニケーションの機会が増え、音読練習を通して、クラスの雰囲気が和やかになったり、協力しようという意識が出てきたりするようになったと思う。一方、課題であった「主語」の認識だが、繰り返し「主語」の重要性を指摘したところ、学習者の意識も「誰が(は)」に向かうことになった。学生によっては、日本語と英語の言語的特性の違いを認識していない者も存在していたため、この点については今後も指導していこうと考えている。

「リーディングⅢ」では、1つのテーマについて賛否それぞれ異なる視点から述べられた英文を読むことで、学習者の思考が深まったと感じている。自分とは異なる見解を持つ人が存在することを理解し、互いの意見を聞き合う姿勢を身につけることは重要である。学生たちは授業を通して、多様な意見を尊重しながら「自分はこう思う」と考えを伝えることの難しさと大切さを学んでいたと感じている。今後も同様の練習を継続し、学生が自分の考えを

より適切に表現できるよう指導していきたい。

「国際文化特講Ⅰ」では、各作品について学生が毎回授業内で発表を行うため、事前学習の習慣が身についたのではないかと考えている。毎回、受講生全員が物語に描かれた文化や時代背景、登場人物について分析することで、多角的に調査・考察する力が着実に磨かれていったと感じている。学期末のレポートからも、学生が作品をより深く理解できるようになっていることがうかがえた（エビデンス③）。

「ニュージーランド研修」（事後学修）では、研修内容の口頭報告に加えて、日本語・英語による報告書を作成し、研修の振り返りや反省点、身につけた技術・知識の活用方法について話し合うことができた（エビデンス④）。今年度は、研修の成果発表を学園祭で実施する機会にも恵まれ、学生は校内だけでなく校外の聴衆に対しても、これまで培ってきたコミュニケーション能力を発揮することができた。聴衆からは前向きな応援メッセージや「発表が面白かった」といったコメントを直接いただくことができ、学生・担当教員ともに大きな励みとなった。

6 エビデンスとなるもの（資料などの名称）

- ①「英語Ⅱ(2)<再履修クラス>」授業アンケート「自由記述欄」（非公開）
- ②「セミナー」後期（学期末）レポート（非公開）
- ③「国際文化特講Ⅰ」の最終レポート（非公開）
- ④「ニュージーランド研修」についてのレポート（非公開）

(記入日: 2026年 2月 4日)

1 教育の責任(何をやっているか:担当科目)

日本の政治と国際社会(1-4 年前後期選択必修科目、2 単位)、海外から見た日本 (2-4 年前期選択必修科目、2 単位)、EIAIII (3-4年前後期必修科目、1単位)、国際文化演習3(2-4年後期選択必修科目、2 単位)、国際文化特講V (2単位)、英会話(1-4 年、参加自由、単位なし)。

2 理念(なぜやっているか:教育目標)

私の教育理念は、メタ認知的教育法とリフレクティブ・ペダゴジーを源としている。その目的は、人間を自主的な学習者として育てることである。こうしたペダゴジーの中核にあるのは、「何を学ぶか」「何を学んだか」だけではなく、「どのように学ばよいか」という、学生自身による継続的な自問自答である。自らの学びの方法を自覚し、分析し、そして管理する能力を培うことが重要である。この学び方の自覚・分析・管理のプロセスを言語化し、共有できるようになることで、現在だけでなく将来においても欠かせないピアラーニングのスキルが身につく。そして、その「ピア」の一員として存在感を増しているのが AI チャットボットである。したがって、AI チャットボットとどのように向き合うかを学ぶことがますます重要になっている。

3 方法(どのようにやっているか:実践の工夫)

EIAIIIの授業は学生達が最後に受ける英会話を中心とした必修科目である。目標は学生達の話す力がCEFR

B2相当のレベルに達することである。2020年度から採用したテキスト*Impact*は学生達のcreativity, critical thinking, communication と collaboration

を基軸にした教材である。*Impact*は学生達の想像力、グループ内の役割分担、情報の処理能力、英語でのコミュニケーション力の発展を促している。ほとんどのアクティビティの場合は学生達がいくつかの違うやり方を求めている課題をまず理解し、話し合い、自分たちのグループ又はペアに合う課題又は挑戦してみたい課題を選べられる。B2のレベルで求められているのは馴染みあるテーマについても、自己の専門分野以外のテーマについても、話題が具体的でも抽象的でも、会話が出来ることである。

外国語を上手に話せるようになるためには、自習が欠かせない。その自習を促し、さらにピアラーニングの場をつくる取り組みとして、上記の教科書には様々な工夫が施されている。現代では、自由時間に YouTube や TikTok の動画を見ることが一般的である。そこで、“Your Digital Self”というテーマを扱う授業では、最近視聴した動画の中から「特に教育的だった」「とても勉強になった」と感じたものを紹介する発表会を行う。発表では、動画の背景や内容だけでなく、制作者の意図や目的、その達成度などにを語る Q&A

の時間を設ける。授業用に与えられた動画ではなく、自分の時間に偶然出会い、学びにつながった動画を扱う点が重要です。動画がどの言語で作られているかは問わない。その動画の内容や面

白さを英語で紹介し合うことが目的であった。このような活動は、授業としても非常に楽しいだけでなく、学生の自主的な知識探究を促すきっかけになることが期待される。

AI

チャットボットの利用についても、授業の中で定期的にその活用を明示的に促す課題を取り入れている。

たとえば、前期のホスピタリティをテーマとした授業準備として、次のような課題を課した。

海外からの観光客のグループを想定し、1

週間の日本滞在プランを作成するというものだ。その際、次の要素を必ず含めることを求めている：アドベンチャー的な体験、日本でしか味わえないユニークな体験、伝統文化に触れる体験、現代的（モダン）な日本の体験、大都市以外の地域観光。また、空港到着から出国までの流れを踏まえ、移動手段、宿泊施設、食事の楽しみなども含めて、現実的で無理のない旅程を作成することが課題の重要なポイントである。加えて、「なぜこの日程としたのか」「各プランの意図や狙いは何か」を説明できることも求めている。さらに最後には、どのようにAIを活用したか、AIの提案をどのように修正・取捨選択したか、AI

と協働する際に気づいた点・反省点について短いコメントとしてまとめさせる。完成した5名の学生の旅程はどれも内容が異なり、個性的で、よく作られていた。発表ではPowerPointの使用を必須としたが、プレゼンテーション自体は学生自身の言葉で行うことを条件とした。その後、聴講した他の学生たちが「そのツアーに参加したいか」「改善した方がよい点はあるか」などについて質疑応答を行う時間を設けた。学生全員が積極的に授業に参加し、楽しんで取り組んでいる様子が強く印象に残った。（エビデンス①）

もう一つの取り組みとしては、毎週、EIAの授業の冒頭5～10分間を

前週のニュースについての話し合いに充てている。取り上げるニュースに制限はなく、学生が選んだものであれば何でもよい。ただし、スマートフォンやノートを見ずに、自分の言葉で語ることを条件としている。準備にあたっては、AI

チャットボットを利用してもよい。ただし、教員として「AI

を使いなさい」とは明示的には指示せず、どのように準備するのが効果的かを自分なりに模索することを促している。学生が自分でスピーチ原稿を作成した場合でも、AI

に書いてもらった原稿をもとに話した場合でも、発表後には必ず、教員として、他の学生たちと共にニュースの背景にある問題意識を深めるための質問や疑問を投げかける。これにより、学生たちが情報の扱い方、内容の整理の仕方、スピーチの構成や表現、AIの利用の仕方などについて、主体的に改善を重ねていくことを期待している。

授業を履修している学生が1

人しかいない場合でも、チャットボットを活用する場面を設けている。たとえば、国際文化のコースの冒頭では、まずヨーロッパに関する既存イメージを言語化するためのブレインストーミングを行う。しかし、履修者が1

人だけのときには、ピアラーニングのスキルを身につけることが難しい。そこでまず、学生が教員のサポートを受けながら、自分の持っている知識を英語で表現する。その後、同じ課題をチャットボットにも与えるように指示する。学生は自分の端末でチャットボットと向き合い、AIが提示した回答を理解し、整理したうえで、端末を見ずに教員へ内容をまとめて伝える。興味深いことに、学生自身が最初に話した内容と、AI

が生成した回答との間には大きな差がほとんど見られなかった。学生自身もその結果に満足して

おり、自分で考え、英語で発話できるという自信につながった様子だった。このように、履修者が1人であっても、AIを「ピア」のように活用することで、学習の質を高めることができると感じている。(エビデンス②)

4 成果(どうだったか結果と評価)

Metacognitive

skillsの面では、学生達が自分の学び方を積極的に管理する価値があること、そして、ピアラーニングを通し学べることが多いことに気づき始めた。(エビデンス③) どのような話題でも、英語で話すことに自信を持てるようになったと述べている学生も。(エビデンス④)

5 今後の目標(これからどうするか)

学生達の学習者オートノミーを育てるために計画的なself-studyを促し続ける。勉強をあきらめない、挑戦し続けたいという姿勢が育つために様々な勉強方法のメリットとデメリットを話し合う場を設ける。モチベーションと自信の向上のために、民間の英語の口述試験の受験を促していく。そして、就職活動に入る前に、英語を使う仕事にも興味を持たせ又は膨らませ、どう実現すればいいかについて考えさせていく。

6 エビデンスとなるもの(資料の種類などの名称)

- ① 授業中のインタラクションと学生のコメント (非公開)
- ② 授業中のインタラクションと学生のコメント (非公開)
- ③ 授業中のインタラクションと学生のコメント (非公開)
- ④ 授業中のインタラクションと学生のコメント (非公開)